

# 昔話における人間と動物

——モシ族（西アフリカ、ブルキナファソ）の事例——

川田順造

## 一、課題と資料

人間と動物の交渉は、世界各地の昔話の中に普遍的にといってよいほど広く見出されるが、その交渉のあり方は文化によって一様ではない。そこには何らかの形で、その文化のもつてゐる世界観、とくに人間とのかわりでの動物観が投影されてゐるとみると、

係を考えることも、条件——文化史的背景や、資料体（コーパス）の比較可能性などに対する考慮——つきで可能ではないかと思われる。周知のように、この領域での日本とゲルマン・ヨーロッパの昔話の比較は、関敬吾（一九七八一八〇、他）、小沢俊夫（一九七九）、中村楨里（一九八四）等によつてすすめられている。

本稿はそのような見通しに立つ基礎作業としての、西スーザンの一社会で筆者が採録した昔話の整理の、覚え書きである。ここで検討する昔話はすべて、一九七七一八年の約一年間と、一九八一年の約六ヶ月間に、西アフリカ内陸サバンナ地帯のブルキナファソ（当時オートボルタ）南部のテンコドゴ地方で、筆者が採録したものである。昔話として採録したものは約六〇〇話。話者は男性女性、子どもから老人までを含む約一二〇名である。話の総数が「約」となつてゐるのは、これらのほとんどが村の夜のまどいでのライヴ録音であり、いわゆる昔話だけでなく、なぞなぞ、ことば遊び、唱え言、さまざまな歌、連鎖ことば等々が、即興的に飛び交う中での録音なので、唱え言との境のはつきりしない話や、話しかけてやめた

もの、話として十分な形をなしていないもの等もあり、主な話の記述や内容検討はしてあるものの、これら混沌としたことばのコーパスの全体を、まだ整理しきれていないためである。話者も、一一三名までは姓名、その大部分については年齢や家族関係なども確認してあるが、話者を同定できない話も若干ある。いうまでもなく、類話もかなり多く、同一の話と認めてよい話もある（中には同一話者が、別の機会に同じ話を、細部の表現はちがうが、していることもある）。話者の過半数は部族的出自からいえばモシ族、他の大部分はビサ族、それによく少數のフルベ族も入っており、ビサ語で話された昔話もあるが、ここで資料体としてとりあげたものはすべてこの地方の共通語であるモシ語で彼らが話したものばかりである（以下この資料体を「モシ資料」と略記）。なお、直接の資料体となつてている前記期間の採録分のほか、その前後の延べ六年間にわたる滯在調査中に筆者がこの地方で採録した昔話も、おそらく一〇〇を越す数のものがあり、未整理ながら、考えをすすめる上で適宜参考した。しかしあとの採録分や、前記資料体でも終りに近い時期の採録では、既出の話型のものがほとんどで、従つて本稿で直接資料とする約六〇〇話は、この地方の昔話の資料体として、ほぼ網羅的なものとみてよいのではないかと思われる。

## 一、ヘビ婿譚

人間と動物の交渉で、最も強い関係を示すものは人間と動物の婚姻いわゆる異類婚、およびしばしばその前提となる変身であり、前

記の小沢（一九七九）と中村（一九八四）の研究も、この二点を中心としている。だが異類婚といい変身といつても、持続した性交渉があつて子が生れているような関係から、間もなく破綻するかりその関係、性交渉が直接は語られてはいないが前後の脈絡から当然婚姻が行われたと考えられる関係等にいたるまで、さまざまな度合のものが認められる。またモシ資料では全体としてきわめて例数が少ない変身についても、日本の昔話と同様、変身しているはずだが変身がとくに語られないものから、一時的な変身、異類婚にいたるような明白である程度持続的な変身まで、さまざまな段階のものがある。

まず、動物が人間の男性に変身して人間の娘と結婚する、またはしようとする話をみよう。これはモシ資料では全資料体中、同型の異伝を含めてもわずか六話にすぎない。

『例1』「娘がある男と結婚してどこかへ行つてしまふ。育ての母が灰を籠に入れて『灰はヘビ除けになると信じられている』娘婿を探し、たずねあてる。娘婿は歛待し、ウシとロバ十頭ずつ、男女の召使い十人ずつをみやげにもたせる。これを見て娘の生みの母が灰を籠に入れて、娘婿をたずねてゆく。歛待するが、金曜日の朝、娘婿は大蛇の姿になつて家の壁からさがついて、義母をのみこみ、骨だけ吐きだす。娘が骨を集めて水をかけると母は甦えり、自分の村に逃げ帰る。」

娘の結婚のいきさつも不明なら、娘婿の家人たちも普通の人間として語られており、この話だけについていえば、娘婿がある瞬間だけ大蛇になつて義母をのみこんだとも思える。しかし、母親が灰を

籠に入れて訪ねてゆくことや、以下の異伝との照合からは、ヘビの人間の男への変身とみるのが妥当だと思われる。

『例2』「ある娘に多くの求婚者がある。カンカーンガ〔野生のイチジクの一種〕の上に娘がのぼって実を落しても、実を拾わない男を婿にするという。大蛇が脱皮して赤裸になり、美しい若者の姿になつて来てイチジクを拾わず、娘と結婚することになる。娘は男について歩いてゆく。男が次々に小石を投げるとオンドリ、ウマ、ロバになつて鳴く。最後にロバが鳴いたところが俺の村だという。村につくと男はヘビに戻り、穴に入つてしまふ。娘が村に帰ると、父親はお前は幽霊と結婚したのだといつてなじる。娘はイチジクの木に登り、下を通る牛牧民のフルベの男に、私がここにいて困つていと父に伝えてほしいと頼む。フルベの男は村に行つて父に告げ、二人して木のところに戻るが、娘は木の上で死んでいた。娘の遺体を村にもちかえつて埋葬した。」

『例3』「ある娘が、母にいわれても家事を手伝わず、結婚も拒む。大蛇がカメレオンに赤い頭巾を、バオバブの樹に滑らかな肌〔バオバブの樹皮は滑らかである〕を、アマサギに白い長衣をもらつて娘のところに行くと、娘は自分の求めでいた夫が来たという。大蛇は家畜小屋に入つたきり出てこない。娘の母親には三人の共妻〔一夫多妻のこの社会での他の妻〕があり、あれは夫ではないから結婚するなどいうが、母は結婚しろという。男は家畜小屋で食事をするという。彼は食物は穴に入れ、いろいろな家畜の糞を袋につめて、娘と一緒にだつて彼の村へ向う。途中カメレオンに会い、娘を半分くれと要求され、断ると赤い頭巾をとりかえされる。バオバブに出会い、

滑らかな肌をとりかえされる。アマサギに白い長衣をとりかえされる。そこで娘は男が大蛇だったことを知る。ヘビは墓穴に入つてしまふ。娘も入り、腰をアリに食われる。ヤギが通りかかるので両親に伝言をたのむ。アリが足から腰まで食つてしまつたと告げるという。父母ははじめヤギを打つが、墓穴に来て娘をとりもどす。よく洗うが、娘はレプラになつてしまふ。

例3には、異なる三人の話者による三つのヴァリアントがある。その一つ『例4』では、伝言を託すのがヤギではなく、例2のようになつてフルベの男で、両親はトビと一緒に娘のところに行き、トビは高くから舞いおりて娘をとりもどすが、父母はトビを打ち殺そうとする。トビはこれに仕返しをするために以後ヒヨコをさらうようになつた。他の異伝『例5』は、「娘が夫と発つたあと娘の母が訪ねてきて歓待されるが、金曜日に大蛇が出てきて母親をのみこんで骨を吐く。娘が骨を集め水をかけると母親は蘇生するので一緒に逃げる。ヘビが骨を集めて水をかけると母親は蘇生するので一緒に逃げる。ヘビが追つてきて井戸のほとりで追いつく。ヘビが井戸に入つたので、母はブンドウ〔ゴマ科の食用になる野草でぬめりが強い〕を練つて井戸のふちに塗る。ヘビが滑つて出られないあいだに、母は逃げかかる。」

もう一つの異伝『例6』によると、「大蛇はその娘より前にすでに三人の妻をもつていた。娘の母が婿に会いに来る。夫が出てこられるように地面に水をまいておかなければならぬ」と妻がいう。四人の妻が代るがわる夫の前に出てうたう。娘がうたうと夫はロバ、ウシ、ヒツジを十頭ずつ母親のために持つてこいという。母親が夫の小屋の前に出ると、夫は大蛇の姿になつて母親をのみこんで骨を

吐きだす。娘が骨を集めて水をかけると母が甦える。灰を籠に入れ、母親にもたせて帰す。」

これら三つの異伝には例1の要素がかなり入っており、結局これら六話は共通の話型からの派生とみることができるのではないかと思う。

ノリード語られてる大蛇は、標準モシ語で「wag-wáasre (*Psammophis sibilans*)」で、どちらもサバンナに多数棲息する無毒の大蛇だ。六話とも、ヘビから人間への変身はさりげなく語られている。例2でヘビが「脱皮する」(fuke)という動詞が使われているほかは、すべて単に「なる、変る」(lebge)という、日常他の脈絡でよく使われる動詞で表わされている。例2では、話者は娘の家の男を指すのにも大蛇ということばを用いており、話を聞く側にとっても、それがはつきり人間の形をしていたのかどうかは大した関心事ではないようだ。

また例3では、十六、七歳の娘である、昔話の上手な話者は、一旦途中まで話したあとはじめから話し直しているが、二度目の話では親のすすめる男と結婚しようとしている我儘な娘を「罰して」(sibge)や「うとヘビがひとり」といい、バオバブ、カメレオン、アマサギなどのところをまわって娘のもとへ行くことになつて居り、おわりに娘がヤギに親へのメッセージを託すときにも、「もの(bumbu)が私を罰した」と娘にいわせている。ヘビとの結婚を幽霊(死靈、kima)との結婚とみなす表現が二度出てくる例2や、ヘビが子どもの姿に戻つて、墓の覆いをとり墓穴に入つてしまふ(例3)という点などから考へると、ヘビを動物とみなして、その人間

への変身および人間の娘との異類婚とみることさえ必ずしも正当ではないかも知れない。モシ社会でヘビと死者とのかかわりを明確に示す信仰や儀礼はないが、墓穴と同じ地下の穴に棲み、脱皮によって死と再生をくりかえすところから、他の多くの文化にもみられるように、死ないし死靈とのイメージの重なりあいが——これらの例話もその証拠だが——存在しても不思議ではない。事実、この話型の一ヴァリアントとして次のような話もある。

『例7』「娘あり、自分の気に入つた夫を探すのだといつて親のすめる男を拒みつづける。死靈が穴から出てバオバブ樹に滑らかな肌を、アマサギに白い衣を、テリムクドリに青い衣を、カメレオンに頭巾をもらつて娘に求愛する。娘は気に入つた夫が来たと父親にいう。食事を用意すると、夫は家畜小屋で食べるという。そして穴を掘つて食物を埋め、ニワトリ、ホロホロチヨウ、ウシの糞をもつて、娘と一緒に旅立つ。やがてニワトリの糞をとつて投げるニワトリになり、鳴く。そこが夫の家だといい、墓の蓋を開けて墓穴に入つてしまふ。そのあたりの木を伐りに鍛治師が来る。娘は墓穴の中から、アリにからだを食われている、村に行つて父に告げてくれと頼む。鍛治師と父親が戻ってきて娘をとりかえし、手厚く看護した。」

人間に変身する動物がヘビでなくライオンだが、話型としてこれらの例と共通点が多いものに、次の話がある。

『例8』「裕福な男あり、年頃の娘が一人いるが、気に入つた夫がみつからない。ライオンが娘のところに来る。娘は私の気に入りの夫が来たという。もてなすために母の石臼で穀物を挽くと、臼があ

れは夫ではないから結婚するなど。娘は臼を打って壊してしまふ。次に母の共妻の臼で挽くと、あれは夫だから結婚するという。

粉を水にといてライオンのところへもつてゆくと「穀粉を水に」といふ「ズム・コーム」を、まず来客にすすめる風習がある。ライオンは地面に穴を掘つて埋めてしまう。娘の父がライオンにロバ、ウマ、ニワトリ、ヤギを与える。ライオンは娘を連れて自分の村へ旅立つ。ロバとウマとニワトリとヤギの糞をもつてゆく。歩きながら次々にそれらの糞を投げると、その動物になつて鳴く。そのうち夫がライオンの姿にもどり、娘を連れて走りまわる。娘は途方に暮れて泣く。娘の父親がお守りの腕輪をつくつて娘にはめてやる。……〔中略〕……娘が腕輪を牛牧民フルベの娘に与える。フルベの娘のところにライオンが行き、フルベの男たちにさんざん打たれて立ち去る。それ以来、フルベたちはライオンを怖れないようになつた。」

フルベはライオンを怖れないということがこの地方ではいわれており、後半はその由来譚のようになつてゐる。しかし前半は例7までの一連の「ヘビ婿」の話といふ形で重なりあつてゐる。娘の家へ訪ねてきた夫をもてなすのに穀物を臼で挽くだけは例3、例7にも語られており、例3でも娘の母と共妻の臼で挽くが、夫についての意見は臼が述べるのではなく、母と共妻がいうことになつてゐる。しかし否定的意見をきいて娘が臼を打つてこわすといふくだりがついているところからも、臼がいう（挽いている音がメツセージにきこえる）例8の方がもとの形ではなかつたかと思われる。また例8では、ライオンが人間の男に変身することはまったく述べられていないが、娘と一緒に道中、次々と糞を投げてゐるうちに、

ライオンに「姿を変える」(tidge)、「なる」(lebge)などと語られてゐるので、それ以前は人間の姿をしていたと推察するほかはない。これらヘビまたはライオンの夫と人間の娘が結婚する話に共通しているのは、娘が自分の「気に入つた夫」(yam sida)に固執して他の男を排除していること、そしてその異類婚はすぐに破綻し、娘は死やレープラ禍も含めて、程度の差はあれ不幸になつてゐることである。娘の結婚の相手は親がしばしば娘のきわめて幼いときから決めるのが仕事になつてゐるこの地方の社会で、気に入りの夫に固執することは、反社会的な行為でもある。我儘娘を「罰する」ためにヘビが美青年に変身して娘の前に現わると述べてゐる例3をはじめ、この一連の異類婚譚は、結婚における娘の反社会性をとがめる一面ももつてゐるのではないかと思われる。

### 三、異類が女性の場合

求婚者が多く、難題を課せられる、難題婿 "suitors' test" と呼ばれるような話型のものはモシ資料にもあり、求婚者たちが女性の場合競争の対象になつてゐる若者の名をあてる、求婚者たちが男性の場合は、名あてのほか、笑わざ口をきかない娘を笑わせしやべらせること、あるいは娘が地面に針を並べて立てた上に木の上から飛びおりることなどが難題の内容となつてゐる。しかしここに例をあげた異類婚では、娘の「気に入りの夫」という規準があるだけで、夫の候補者がテストされるということはない。

「女性が男性配偶者に対して異常に選択的な婚姻」であるこれら

の異類婚譚の対極に、「男性が女性配偶者に対する異常に無選択な婚姻」が考えられるだろう。そのような性格を示す異類婚譚は、モジ資料に二例だけ（同一話型のヴァリアントとみなしうる）だがある。ここでは動物はサルであるが、サルから人間の女性への変身ということは、二例のどちらでも述べられていない。

《例9》「ある男が、女ならば素っ裸でも美しくなくてもいいから嫁に欲しいものだと考えていた。男は女に出会った。女はサルだった。女は男に、穀物は作っているか、豆は作っているかとたずねた。男はみんな作っていると答えた。女は男の家へ行き、豆を煮て売りに行った。村はずれに来ると、女は高い木に登つてうたい、仲間のサルたちに呼びかけ、豆一粒をタカラガイ一個で売った。豆は売り切れ、女は家に帰つて男にたくさんタカラガイを渡した。あくる日も女は同じようにして豆を売つた。ある日一人の狩人が、女が木に登つてそうしているのを見てしまつた。狩人は夫に教え、夫は狩人と木のところに行つて女がうたうのを見た。女が家に帰つてくると、夫は『お前はあんなのだつたんだな』となじつた。女は『あたしが何をしたっていうの、お前さんのために毎日かせいでいたのに』と駁明したが、男はきかず、女のどを切つて沼に投げこんだ。沼から帰ろうとしてライオンに出会い、ライオンは男を食べて骨だけ吐き出した。」

《例10》「男あり、よく耕して食物はたっぷりあつたが、妻子がなかつた。荷物をまとめて妻を探しに出かけた。美しい娘に出会い、口説き、家に連れ帰つた。次の市の立つ日、男は穀物をヒヨウタンの鉢に入れて女に与え、女は売りに行った。荒れ野のただなかに来

て、女はうたつて仲間のサルたちを呼び集め、穀物を与え、サルたちはヒヨウタンの鉢をこわしてしまつた。女はヒヨウタンのかけらを集めて家に帰つた。女は市でヒヨウタンをこわされたといつた。こうしたことがつづいたある日、男の友人の狩人が目撃して男に告げる。二人は市の日に女のあとをかくれてついてゆき、サルたちが穀物を食べるのを見、家で女の帰りを待ちうけて殺してしまつた。」

例10では、女がサルだったということは一言も述べられていない。だが、女がサルたちにうたで呼びかけることは『私の仲間のサルたち』であり、この文句は例9の、サルである女が木に登つて仲間を集めるとのうたのよびかけと同じだ。全体の構成からみても、例9と同型と考えてよいのではないかと思われる。ただ、例9ではサルが人間の夫に富をもたらすのに対し、例10では逆に人間の夫から奪うだけだ。二例とも、女が殺される点も共通している。

動物から人間の女性への変身と、人間の男性との異性愛を語つているものは全資料体中二話あるが、同一話型のヴァリアントとみることができる。

《例11》「狩人がいて、野のいろいろな獣を殺し、今度は全部殺してやろうと考へた。のこつた獣たちが集まつて相談する。その狩人はイヌを三四頭つてゐるので、それをまず殺さなければと話す。ヤギュウが二匹、若い娘になつて狩人の家へ行き、泊めてもらいたいという。食物が欲しいが、イヌの肉が食べたいという。狩人のイヌ以外にないので、狩人は自分のイヌの一匹を殺して娘たちに食べさせ。狩人の母はイヌを殺すなというが狩人はきかずに殺したので、母親はイヌの骨を集めて甕に入れ水をかけるとイヌになる。そこに

隠しておく。娘たちはもっとイヌの肉を食べたいという。狩人はもう一匹殺す。母親は骨を集めて甕に入れて甦えらせる。娘たちがまた要求し、狩人は最後の一匹を殺して食べさせる。母親は骨を集めてしまふ。娘たちはそのことに気付かない。娘たちが帰るといふと、狩人は危険だから鉄砲をもつて送つてゆくという。娘たちは、鉄砲はもたないで欲しいという。荒れ野を歩いてゆくと、クカ「アフリカ原産のセンドラン科の喬木」が立つていて、娘たちは狩人に、あの若芽を葉にしたいから木にのぼってとつてくれとたのむ。幹が高いので、丸太を立てかけて狩人はのぼる。狩人が上のぼると娘たちは木の台をはずしてしまい、ヤギュウの姿になつて吠える。その声をきいて、いろいろな野獸が集まつてくる。サイチョウが長いくちばしでクカの幹を切りはじめる。木が倒れる寸前に、狩人はかくしに呼びこがあつたことに気づいて吹く。母親が甦えらせておいた三匹の犬が走ってきて野獸たちを噛み殺し、狩人を助ける。このあと、イヌがゾウのふぐりを噛みちぎり、そのゆくえについての捕話がかなり長くつづくが省略する。

『例12』「狩人がいて野の獸をみな殺しにしようとする。シカが、自分が狩人をつかまえようと他の獸たちにいふ。シカは若い娘になつて狩人のところへ行き、あなたの呪薬を教えてくれといふ。狩人は、もし自分が狩人に追われたら、自分は風になつたり、アリになつたり、ヤギになつたり、何にでも姿を変えることができる。縫針にもなれる、というと、母親にそんなことを喋るものではないと止められる。娘が帰るというので狩人が送つてゆく。野の中にクカの木が立つていてるところへ来て、娘が狩人に木にのぼつて葉をとつて

きてくれとたのむ。丸太を探してきて幹にたてかけ、狩人がのぼると、娘は木の台をはずしてしまう。娘は野の獸たちに、とうとうつかまえたと告げる。獸たちが集まつてくる。狩人はイヌを飼つてたが、その娘が殺して食べさせてくれといったので、三四匹殺したが、母親はイヌを呼べといつていた。狩人が呼びこを吹くと大きなイヌが立ち上つて走つてきたので、野獸たちは逃げ、狩人は木を降りて家へ帰つた。」

例12では、娘に変身した野獸が狩人にイヌの肉を所望するくだりを話し手が言い忘れたらしく、あとで簡単につけ加えている。娘に変身する動物の種類も數もちがうが、例11、12は同一話型のヴァリエントとみてよいだろう。これら二例でも動物から人間、あるいは人間から動物への変身（後者は例12では語られていない）は、いずれも前出の「なる」(einge)という動詞で表わされており、当事者がただそぞ望むだけで姿が変るのであり、外的な力や呪法が働いているわけではない（ただ、例12でシカが変身した娘に訊ねられて狩人が語る彼自身の変身は、呪薬(jinn)によるものであるらしい）。そしてこれらの変身は、狩人をおびき出してとらえるための一時的で便宜的な擬装であることがわかる。人間の娘になることが、若い独身者があるらしい狩人を異性としての魅力でおびき出す手段として選ばれており、狩人もおそらく異性の魅力ゆえに見知らぬ娘のためにイヌを殺したり、帰るとき送つたりするのであろう。しかし恋愛というほどのものは語られていて、婚姻も行なわれない。

便宜的かつ一時的な変身ということであれば、次のような例も挙げられる。

《例13》「自分に合った夫を見つけられない娘が、男のようになつてウマに乗つて旅立つ。ある首長を訪ね、逗留するうち、女であることが知れてしまい、首長は娘をめとろうとする。娘は拒み、ウマを逃げる。追手の目をくらますために草に変身するが追手が火をつけるので、イナゴになつてとびだし、またウマにもどつて逃げる。〔以下略〕」

また、きわめて断片的な話にすぎないが、魚から人間への変身の例に次のものがある。

《例14》「市で出会つた若者たちと娘たちがむつまじくなる。若者たちは実は魚の変身したもので、娘たちと一緒に歩くうち、沼のほとりに来ると魚の姿に戻つて沼の中に入つてしまふ。」

#### 四、人間から動物への変身

次に、人間から動物への変身についてみよう。これはモシ資料ではきわめて少なく、全資料体中三例に認められるにすぎない。

《例15》「七人の兄弟あり、みな結婚し、最後に結婚した長兄の妻だけは、主食につけあわせる汁に肉を入れないと料理しない。夫に肉を買う金がなくなる。小鳥でもとろうと思つて荒れ野に行くと、小鳥がいて、『男が来た、何をしに来たのだろう、肉を探して小鳥を殺しに来たのだろう』とうたう。夫が小鳥のあとをついてゆくと一人の男に出会い、わけを話すと肉をくれるというので一緒に行く。しかし男は木に登つて大蛇になり、夫をのみこんでしまう。」

《例16》「女あり、娘一人あり、綿で糸を紡ぐように言いつけるが、

娘は沼へ水浴びに行つてしまふ。沼で娘はワニにとらえられ、老魔女「夜睡眠中浮遊する人の魂をとらえて食うと信じられている女」につかまえられ、ササゲと一緒に鍋で煮られてしまう。娘の母親が探しに来て、娘が老女にとらえられた悲しみをうたう。老女は母親が鍋の肉を食べさせるが、母親は骨を見てそれが娘だと知り、うたう。老女はヘビになつて小屋のまわりを巻く。人々が来てヘビを殺す。」

この二例でヘビに変身する男と老女は、いずれもモシ社会で異界とされているウエオゴ（weogo 本稿では「野」または「荒れ野」と訳したが、人間の文化の領域である「イリ」yili=里・家に対する、人間の支配的及ばない自然の領域が「ウエオゴ」であり、日本語の山、野、異界などが表わすものに相当する。森や山のない西アフリカのサバンナでも、これは野獣や精霊の跳梁する世界である）の化身のようにして現われてくる存在で、人間としての容姿や属性は何も明らかにされていない。

一方、これまでに挙げた例での自発的変身と異なり、この地方の社会でしばしば呪物とされているズーレ（zurore 野獸などの尾）で触れて人間をウマに変えるというモチーフを含む話が一例だけある。首尾一貫しない冗漫な話なので、変身のくだりの要点だけ記すと、

《例17》「三人兄弟の末弟がこの尾（その由来は語られていない）で触れて兄二人をウマに変えて売り、兄たちはすぐ自分で人間に戻つて帰つてくる。そして兄たちが今度は末弟をウマに変え、売つてはならないとされている片目の男にこのウマを売る。弟は逃げ帰り、また兄たちをウマにして売つてしまふ。」

ここでは、人間をウマに変えるのは呪力をもつた尾によっているが、ウマになつたあとは、各自自分の意志で人間に戻つてゐる。

## 五、形の上で異類婚

動物から人間への変身が語られていないが、しかし人間との婚姻あるいは配偶関係が明らかに示されている話は、異伝も含めて四例ある。

《例18》「ウサギとハイエナが同じ人間の娘に求愛する。ウサギは娘の歎心を買おうとして、ハイエナにウマのように乗つてみせるという。ウサギはハイエナに、葬式があつてウシやヒツジやヤギなど沢山動物がいにえにされて肉があまつていいといつてだまし、木炭とカリテの油〔アカテツ科の野生樹の種子からとる植物性油脂〕を膝に塗つて病氣のふりをし、ハイエナにまたがつて行き、娘と結婚する。」

この話型には、ウサギとハイエナが、同じ村の二人の娘と婚約中で、結婚式の日にウサギがハイエナにまたがつて行って、二人の娘を同時に妻にするというヴァリアント《例19》がある。

《例20》「ヒキガエルとブルンボアカ〔両棲類の一種〕が、同じ人間の娘に求愛する。ヒキガエルは娘に、ブルンボアカは目が見えないのだといふが、ブルンボアカは、そんなことはないといふ。あるとき、一緒に娘の家に出かけるが、ブルンボアカはあちこちにぶつかり、娘はヒキガエルと結婚する。」

《例21》「三人の妻をもつ男がいた。第一の妻はニワトリだった。

第二の妻はホロホロチョウだった。第三の妻はサイチョウだった。あるとき夫は旅に出る。留守中、もし家の前のグングガ〔パンヤ科の喬木〕が枯れ、ニワトリの水のみの水がなくなつて中が白くなつたら、自分が死んだしるしだといいのこす。一年後にグングガが枯れはじめ、水のみの中が白くなつた。ニワトリとホロホロチョウは悲しんでうたうが、サイチョウは、まだほかにも男はいるから夫は見つけられるとうたう。夫は死んでいず、帰ってきてこれをきいていた。旅に出る前は、サイチョウが夫のルムデ（rumde 気に入りの妻）で、夫はサイチョウのつくった食事しか食べなかつたが、このとき以来、サイチョウはルムデでなくなつた。」

これらは、形の上ではたしかに異類婚であるが、しかし例18、19は黒人アフリカに広く話されているウサギがハイエナをだます話の一つで、その話を成り立たせるために、人間の娘との婚姻が設定されている感がある。例20も外見は似ているが属性の異なる二種の動物を対比させた寓話の、一つの参照点として人間の娘との結婚が置かれているにすぎず、例18～20のいずれにおいても、娘とこれらの動物の間の、異性としての愛憎関係はまったく言及されていない。例21の三種の鳥類は、妻の夫に対する態度の寓意を担つたものとして語られている。夫に忠実であるのが二種の家禽で、はじめ夫に寵愛されていたが、不忠実であることが露見する妻が野鳥であるサイチョウで表わされているのは興味深い。（モシ資料中、野ネコと家ネコ、イヌとハイエナを対比させた話が各一例あるが、いずれも家畜をすぐれたものとしている）サイチョウは人里離れた荒野に家族生活を営む鳥として土地の人々に畏敬されており、その巨大なくち

ばしばよく呪物としても用いられる。これに対し、ニワトリとホロホロチヨウは、村落生活で最も身近な家禽で、先祖祭祀をはじめとする儀礼で最も安直にいけにえにされる動物である。

## 六、異類婚から生れた子

これまでにみた例では、人間と動物の異性間関係から子が生れたことを語る話は皆無だった。しかし、変身を伴なわない動物（雄）と人間の女性の性関係の結果人間の子が生れることが、全資料体中、次の二例にみられる。前者はモシ資料に限らずアフリカの昔話に多い“怖るべき子どもたち”的アリアントであり、後者は、これもアフリカに広く語られているウサギの知恵話の一つである。

《例22》「双子のラオゴ（男の子を代表する名）とポコ（女の子を代表する名）あり、彼らの父はカマキリだった。母が子に父の食物をもつて行かせるとき、ラオゴは棒をもつていつて父を殺す。ラオゴはポコに母を殺せ」という。ポコは反対するが、ポコを脅かして、酒を醸している大甕の中に母を投げこんで殺す。二人は家を棄てて旅立ち、途中会った男の連れていける子を殺し、老女を殺し、王の飲物の中に唾を吐いたり小便をしたりし、命を助けてくれたヤギを焼いて食うなど、反社会的行為、忘恩行為の限りを尽す。」母の足の拇指から生れるなど、異常出生の子（しばしば兄妹の双子）が、異常能力をもち、父母を殺し、危急を救ってくれた動物を殺し、出会った他人の赤ん坊の頭を焼いて食うなどの行為をつづけながら旅をする話は、話型の設定の仕方にもよるが、モシ資料にも

数例のヴァリアントが含まれている。しかし、父がカマキリであることを語っているのは、例22のみである。父がカマキリであることについては、ラオゴが父を「頭の無格好な奴」とののしるところがあるが、他にはカマキリとしての父の性格に言及しているところはない。また、カマキリがモシ社会の儀礼や図像表象で意味をもつているということも筆者は知らないし、昔話、歌、なぞなぞ、ことわざ、人名にもカマキリはこれ以外には登場しない。

《例23》「身寄りに皆死なれて一人になった女あり、村人たちが女人をこしらえてやる。ウサギが野から穴を掘つて女の小屋の中に出で、女と交わり、男の子を産ませた。村人は女が男といふのを見なかつたから、誰の子だらうといぶかしがつた。男の子は大きくなつたが父親がわからない。野の王ライオンが動物たちを集め、女と男の子も呼んで、男の子に父親を探させた。男の子はウサギのところへ行つた。ライオンは、ウサギを男の子の父親と認定し、ヒョウの毛皮と、ゾウの牙と、ヤギュウの乳をこの子にもつて来てやるよう」という。そのどれか一つでもとろうとすれば、ウサギは命を失なうにきまつてゐる、と他の動物たちは考えたが、ウサギは首尾よく三つのものを手に入れる。」この話の主眼は、ウサギが奇想天外の計略で三つのものを手に入れる過程のおもしろさにあり、人間の女に子を産ませる一件は、ライオン王がウサギに難題を出す動物づくりのために付け足されているとも思える。しかし、ウサギが人間の女性に子を産ませるモチーフは、やはりその結果課せられる難題と組みあわされて、別の話にもあらわれている。

《例24》「王が、男を受けつけない娘のために戸のない小屋をつく

り、娘をそこに寝かせる。しかし娘は男を識らうとしない。ウサギがこれをきいて、ノネズミに地中に穴を掘らせて娘の小屋に入つて、娘を孕ませる。王は誰が娘を孕ませたかをつきとめようとして、野の獣たちをみな召集し、大きな川を泳いで渡るように申渡す。ウサギが張本人であることはうすうす知れていたのだ。ゾウ、ライオンなどみな次々に泳いで対岸へ上り、最後にウサギがのくる。泳ぎの不得手なウサギは水に流されながら、これは昔の泳法なのだと負け惜しみをいう。」

また、前半の人間の女性を孕ませるくだりがなく、後半の難題解決が例23とよく似ている(例25)では、「ウサギが早く走れるようにして下さいと神に願う。神はマムシの鼻汁と、ヤギニウの乳と、ワニの皮と、ゾウの牙をもつて来るよう申付ける」という話になっている。

やはりウサギの知恵話に、ウサギが人間の娘と結婚することが付け加わった例としては、次のような話を挙げることができる。

『例26』「王に美しい娘がいてみな結婚したがる。王は獣たちを集め、さるに一杯のトウガラシを入れて、これを『スー、ハー』とやらぬで全部食べられたら、その者に娘を与えるようと申渡す。みな試みるが、途中で『スー、ハー』とやつて失格する。ウサギが最後に立つて『ライオンどんは、スー、ハー』とやつてしましましたね。けれどもわたしは、スー、ハーなんてやつて王さまの娘をもらいそこなうようなへまはやりませんよ」と、前にやつた動物たちの真似を次々にしながら、トウガラシを全部食べて娘をもらう。」

『例27』は前話と同型だが、難題の内容が、キンタマが鳴るほど

踊れる者がいたら娘を与えるというもので、ウサギはだぶだぶの袴の中に、ニワトリとホロホロチョウのひなを入れてゆき、踊つてこられるひなを鳴かせて王の娘をめどる。

例23、24、26、27では、ウサギの相手となる女性とその父親、または女性の子だけが登場人物のうちの人間で、他はすべて野の獣であることの大きな特徴だ。ウサギは形としては獣だが、機敏に知恵を働かせる存在の象徴であつて、いわゆる『異類婚』譚の性格は稀薄だ。ただ例24は、前出のヘビ婿、ライオン婿譚にみられた、拒否的な娘をあざむくという性格も想起させる。

やはり、うまく立ちまわるウサギ対欲ばかりでどじなハイエナの、西ステーダンのみでなく黒人アフリカにきわめて広く語られている話型での、一つの帰結としてのウサギと人間の娘の性関係——ただし、直接には話の中でそれが語られては、話の脈絡からして性関係があると推定できるにすぎない——は、次の話にもみられる。

『例28』「ウサギが荒れ野を旅していると、一軒家があり、男の子が家の前にいる。一晩泊めてほしいというと、薪をとりに行つた父母がまもなく帰つてくるが、〔頭上運搬してきた〕薪の束を放り出したとき、はずみでフンドシがはずれても笑うなという。ウサギが男の子と待つていると、まもなく男の子の両親が帰つてきて薪を投げ出し、そのはずみでフンドシがはずれる。しかし、ウサギは笑わずにいる。両親はウサギに裏のバオバブの木に棒を投げて実を落として食べよといい、棒を二本投げると美しい娘が二人落ちて来たので、妻にして連れ帰る。それを見たハイエナがうらやましがり、真似をするが、フンドシがはずれたのを見て大声で笑つてしまう。」

をバオバブに投げると七人の小人が落ちてきて、手に持った棒でハイエナを打った。」

やはり婚姻そのものは語られていないが、前後からして、当然動物の雄と人間の娘が配偶関係にあると考えられる話に、『例29』「ハイエナがしゅうとの煙を荒らすサルを退治する役を買って出る。実際に出てきたのは大きな強いサルで、ハイエナは糞をたれて逃げまわる「糞をたれるのは敗北のしとされる」。翌朝、ハイエナはしゅうに向って、昨夜サルが出てきたが打つてこらしめてやつたので、糞をたれて逃げたと告げる。しゅうとは、とり逃したのは癪念だが、糞にかけるとその糞をたれたものが死ぬ呪力をもつ粉があるから、それを烟の糞にかけてやろうという。ハイエナは慌てて、サルと格闘中、自分も糞をして混りあっているから、粉をかけないでくれと頼む。しゅうとはよく糞を見て、『これはハイエナの糞だぞ』といい、ハイエナの嘘がばれる。」

ここではしゅうとはただデーマ(deema 義父)としてのみ指示されており、とくに人間とも、ハイエナとも断つてないが、話全体の感じからしても、またこの婿殿がハイエナの一個体の婿としてではなく、動物の種としてのハイエナを一般的に表わしているところからも、義父を人間とみる方が自然であるようと思われる(土地の人も、とくに明確ではないが、そうみなししている)。義父に対しても、女婿が見栄を張ることは、この地方の社会にひろく見られ、義母の葬式にハイエナにまたがってゆくウサギの話(『例30』)も、ウサギ対ハイエナの物語の一話型として、前述の例18、19をはじめ、モシリガエルの方がましだといつて、沼で娘をヒキガエルととりかえる。資料でもいくつかの異伝が語られている。この場合も、登場するの

は動物の種としての人物(キャラクター)であつて、ある動物の種の中の個としての登場人物ではない。その葬式の情景、いにえにされる動物などからみても、ウサギの義父は人間であると思われるが、ここでも『異類婚』はウサギハイエナ譚を成り立たせるための、他のものでも代替可能な一要素であるにすぎない。

## 七、人間・動物間の貸与、交換

昔話の中での人間と動物との『ばげしい』関係は、両者相互の変身や通婚にだけみられるのではない。両者の身体の、部分的あるいは全体的な貸与や交換を示す話も、モシ資料にわずかだがある。

『例31』「ある男と相愛の娘が王の側妻にとられる。男はその王妃の叔母のよりをして王宮に入り、睦みを重ねる。王宮内での全女性を集めて踊りのあと腰布をとらせ、女性かどうかあらためることにする。叔母に化けた男は困窮し、前夜沼のほとりに行つて泣いている。カエルが出てきてわけをきき、自分はいま妊娠中で要らないからわたしの性器を貸してあげよう、ただ出産のときは必要だから返してくれという。男はカエルの性器を借りて無事王の検査をパスし、恋人と好みづけるが、カエルに性器を返すのを忘れてしまう。出産間近になつて、カエルは苦しいので性器をとり返しに王宮に出かけるが、逆に男に壁にたたきつけられて殺されてしまう。」

『例32』「娘あり、母親は娘を怠け者と思い、働かない娘よりヒキガエルの方がましだといつて、沼で娘をヒキガエルととりかえる。

畠へ行くとき、娘の母はカエルに穀物を挽くようにとのこしておく。カエルは娘に穀物を与え、娘は家に帰つて穀物を挽き、夕方沼に戻る。母が帰つてみて穀物が挽けているのをみて、やはりカエルの方がいいという。こういう日がつづくが、娘が臼を挽きながら身の上を悲しんでうたつているのをきいた人が娘の両親に告げ、父母もかくれて娘の歌をきいて後悔し、娘を家に戻す。」

例31では、カエルの女性性器が特別の手続きもなく人間の男性に適用され、しかもその後その男性が恋人と夜を共にしつづけているところからも、再びとりはずし可能なのである。モシ資料では性器の独立性、着脱可能性を示す話が他にもいくつかある。膣と陰茎と睾丸を独立のキャラクターとしてそれらの関係の由来を説いた話《例33》、ある男が妻と友人の妻を連れて旅をし、腰まで水につかって川を渡つたところ、対岸に着くと女性二人の性器が流されていた。水中を探して、男は一つだけ性器を見つけたが、彼はこの性器を自分の妻と友人の妻どちらに与えるべきかと、最後に話し手が引き手に問いかける、アフリカに多い問い合わせなし（ジレンマ・ストーリー）《例34》、ヘルニアの陰嚢が独立して食事をしたりする怪奇譚《例35》、前出の例11の後半で、イヌに食いちぎられたゾウのふぐりが、それを煮ようとした老婆の鍋から出て老婆を殴り倒す挿話、等々。

動物と人間の「はげしい」交渉の他の側面に、動物が人間をのみこむ、または食つてしまふというモチーフがあげられる。これは、前出の例でもすでにヘビが人間をのみこむ（例1、5、6、15）、異類婚の結果、妻であるサルを殺した男をライオンが食う（例9）

などがあり、例15以外は「骨だけ吐き出す」ことが付言されており、例1、5、6では、骨に水をかけることによつて、のみこまれた老婆が蘇生している。

さまざまな動物が人間を一時ののみこむというモチーフは、狩人の息子が父の制止をきかず狩について荒れ野でいろいろな野獣や怪物に出会う話型の異伝の中に出でくる。その一つ《例36》では、ライオンの追跡から狩人の父子を守るために、クモ、ハチ、老女が人間をのみこんで逃げ、また吐く。人間が鳥にのまれるモチーフは、前記の例22に「ヴァリアントを示した“怖るべき子どもたち”的の他の「アリアント」（例37）の中にもみられる。そこでは、男子（異能児）がワシにのみこまれるが尻から出ることを三度ぐりかえしたあと、ワシを殺してしまう。

沼の異界性と結びついたのみこみモチーフとしては、《例38》「ワニに誘われて沼のほとりに行つた子供が、コーム・ブンブ（水のもの）にのみこまれ、あとで怪物を退治して腹の中から子の死体をとりだす」話や、《例39》「禁を破つて沼に行つた娘が腰飾りをとつて水浴びし、ワニにのみこまれ、太鼓をたたいて探すと娘が応答する話」などがある。

人間をのみこんでしまうのは動物に限らない。沼とならぶ「異界」である大樹の洞に、やはりブンブ（もの）がいて娘をのみこむ話が一例ある。

《例40》「男あり、妻あり、六人の娘があつた。ある日六人の娘が野にゆき雨に会う。カンカーンガ「野生のイチジクの一種。幹が巨大。例2にも出でている」の洞に入つて雨やどりすると、中にブンブ

(もの)がいて六人の娘はみんなこまれてしまう。父母が探しにゆく。六人の婚約者が次々に弓矢、槍などもつて行くが逃げ帰り、末娘の婚約者がカラント（肉切り大包丁）でものの首を切って六人の娘を救い出す。」

ここではものは樹木の精のように語られてはいらず、木の洞は単に異界としての場になつてゐるにすぎないようと思われる。

より直接に、植物が人間をのみこむ話に、家の裏のヒョウタンのつるがのびてきて、親の留守に子どもたちをのみこんでしまう話（例41）があり、ヒョウタンを二つ割りにして使う由来譚になつてゐる。ヒョウタンは西アフリカ内陸の原産で、この地方には多くの変種があり、タテニツ割りにした半球形の殻の中で、赤ん坊に行水を使わせるような大きいものもある。

さらに全資料体中一例だけだが、人間の両親から半人半獸の男の子が生れる話がある。

《例42》「妻が懷妊し、夫のもつてくる肉がすべて食べられない。ロバの肝臓を食べたい」という。夫は自分のロバを殺して肝臓を与える。生れた男の子は、ロバの耳とロバの額とロバの足をもち、胴体だけ人間だった。男の子は村を離れて荒れ野に行くが、人々はロバ

を打つようこの男の子を打つ。母親が連れ帰る。夫は妻が厄介者を連れ帰ったことに不満で、妻を殺してしまう。男の子はまた荒れ野に行つてしまふ。夫は後悔して男の子を連れ戻しに行くが人々に妨げられる。夫は自殺する。教訓、自分のほしいものにこだわってはいけない。」

ここでは、半分ロバの子を生んでしまつたことに対する怖ろしさ

とその子に対する不憫さのみが語られ、結局両親が悲惨な死をとげるが、子の属性や成りゆきについては何も語られていない。末尾の教訓も、懷妊中の妻の我儘をいましめているにすぎず、半人半獸の子の誕生も、その我儘への一つの罰として設定されているように思える。

人間と動物の交渉のあり方を他の方面に拡大してたどつていけば、聴耳とか“Speaking animals”(Animal language)などと呼ばれるモチーフも含めた、いとばの面での人間と動物のコミュニケーションも、重要である。モシ資料にも聴耳のモチーフを含む話は二例（例43、44）あり、いずれも洞——例43ではライオンの棲家である洞穴、例44ではバオバブ樹の幹の洞穴——という“異界”にたまま身を置いた人間が、それぞれライオンおよびトビの話をきいて、目あけ薬の調合法と、例44ではそれに加えて井戸を掘れば水の出る場所とを知り、人助けをする。聴耳モチーフの側面はもつていなくとも、里（家）に対する異界としての野（大樹）および沼と里（家）とを結ぶメンセンジヤーとしての鳥——とくにキジバト——とカエルの役割が語られている例は、モシ資料にかなり多い。

変身の一つの延長として、植物から人間への変身の事例をみよう。モシ資料には、木の実が人間に変る話が数例あり、娘に変る場合は人間の男の妻になる。その一話型は、バオバブの樹上に棒を投げる実が落ちてきて美しい娘になるもので、前述の例28のように、ウサギハイエナ譚に付隨する形の話は他にも一例（例45）あるが、地上に落ちてまずモシ語の女ことばの挨拶をし、それへの対応の仕

方でバオバブの実が美しい娘に変つて弟の妻になつたり、真似をし

た兄が対応を誤つて実が陰嚢ヘルニアの男になつて兄を苦しめたりする。モシ資料には、樹上または樹の洞が食物や宝を与えるモチーフの話が多くあり、例45も植物から人間への変身譚として位置づけるよりは、「宝のなる木」の一ヴァリアントとしてとらえるべきかもしれない。

《例47》「老女あり、食べるものがなくなり、荒れ野でカリテ〔アテツ科の野生樹で、種子の中の油脂を水を加えて煮て分離させ、食用、皮膚塗布用の、常温でマーガリンのようになかたまつてある油脂を作る。果肉はそのまま食べられる〕の実を拾い、果肉を食べて種子を捨てる」と、種子がもつてゆけという。もちかえると、こわしてバターをつくれという。バターをつくると美しい娘に変わる。王がこの娘を所望する。陽にあたるとものとのバターになつて溶けてしまふので、王は娘の家まで屋根をつくらせて妃を迎える。バターラ娘は王の寵愛を受けるが、他の妃たちは嫉妬する。ある日王が狩に行つている留守に、他の妃たちが酒を醸すのに火を焚き、バターラ娘にまどろみの火の番をさせる。溶けたところを犬になめさせようとするが、犬はなめないで王に知らせにゆく。王は帰つてかまどの火を消してバターラ娘をもとに戻し、他の妃たちを大穀物甕に入れ、まわりから火をつけて焼き殺してしまう。」

これにも異伝がいくつかあるが、バターラ娘が王妃になること、他の王妃たちにねたまれて王の留守に溶かされてしまうことは共通している。この話型も、娘と王の関係を中心となる異類婚譚であるよりも、むしろ、これもきわめて類話の多い、共妻間の嫉妬反目譚の

一つの趣好とみる方が妥当であるとも思える。

## 八、モシ族の自然観

口承芸芸としてのモシ資料にあらわれた人間と動物との関係を、右のように概観したあと、モシ族の自然観のあり方を、紙数の制約できわけて簡略にしかすぎないが、人間と動物の関係を中心についてみよう。

まず、世界の全体はウェンデ *wende* と呼ばれる不可視の根源的な力によって創られ、動かされていると信じられている。人間はウェンデに對して豊作や健康、繁栄を祈願するのだが、そのとき有力な媒介となるのが祖先の靈と、キンキルシ (*kinkirs*) と呼ばれる野の精靈である。キンキルシは見たという人もいるのだが、通常は人里離れた荒れ野に、人間のような家族をつくつて棲む小さな姿をした存在で、足を使わずに移動し、夜は闇とともに里にまで来ると考えられている。人間の誕生は、直接には男女の性交の結果だが、キンキルシの力によるとされており、キンキルシが野でいわば「未生以前の世界」を作つているように考へている人も多い。しかし、祖先の生れかわりとみなされる赤子もいて、人間の生前と死後の世界のかかわりについては、必ずしも整合的に明確ではない。ウェンデに向つて、多くは祖先やキンキルシを通じて祈願、感謝するとき、人間は祖先の墓や、キンキルシの宿りがとされているテンガンデ——多くは奇異な形をした岩や茂み——に出血供犠をする。このときいけにえにされるのはすべて家畜家禽であり、氏族ごと、家族ご

との年次祭ではニワトリ、ホロホロチョウ、個人の葬式などではこれにヤギが加えられ、最高首長である王にいたるさまざまなレベルの首長の祭儀では、そのほかにヒツジ、ウシなども屠られる。いずれも、犠牲動物のなどを切って生き皿を聖所にそそぐのである。野獸のいけにえはモシ社会では行なわれない。

人間はニンサーラ ninsala<sup>アマリ</sup> 「毛のない滑らかな膚をもつもの」と呼ばれ（前記例3、7などでは、バオバブの滑らかな膚を得ることが、人間に変身する一過程になつている）このような皮膚とヤム (yam 思慮、分別、理性) をもつものとして、他の生物から区別される。しかし、人間と動物とはニヨーネ (yoore 鳥) をすることとそれ以外のものと区別される。動物一般を指す総称はないが、哺乳類にあたるようないわゆる動物はドゥンガ (dunga 複数形は省略。以下同じ) だが、前述のイリ (iri 家、里) とウエヒ (wego 野、山) の基本的な二分に対応して、イル・ドゥンガ (yir-dunga 家畜)、ウェオ・ルンガ (weo-runga 野獸) が区別され、これは括弧内に示した日本語ともよく対応する。

鳥一般はリウラ liwla と呼ばれるが、これはいわゆる翼で空を飛ぶ鳥であり、ニワトリ、ホロホロチョウなどは含まないが、後者の総称はない。爬虫類、両棲類、虫類をそれぞれ指す総称はない。魚は、元来ナマズを指す語だったジンフ zimfu という語が、魚の総称としても用いられる。生物として、ところより食用として魚を指すときはクルゼード kulzeedo<sup>アモリ沼や川でとれる、つゆの実</sup> になるものという意味の語を用ひる。

植物の総称ではなく、ヤード (moodo 草) ハティーガ (tiiga 木)

という総称がある。ただし、モードは食用にならない、野に生い茂る草の総称で、食用、つまり一般にいつて、主食につけあわせるつゆ (zeedo ゼード) の実になるものは、ゼードと呼ばれる。

動植物と人間の転生觀はない。父系氏族ごとに食用を禁じている動物の種はあるが、その由来は、先祖が荒れ野で困窮しているとき助けてもらったというものが多く、少なくともその動物を先祖となしていっているではない。また、個々の動植物や岩などに、人間と同じような魂を認めるいわゆるアニミズムの傾向はモシ社会にはまったくない。ウェンデ (神、世界の根源の存在) の定めた掟、運命 (ウェン・アレムド wēnd-pulemdo) に対する信頼がつよく、「薬草の根を掘る人が百人集まつても、ウェン・アレムドを掘りとる」とはできない」というような箴言もある。一般的にいつて、モシの人たちが動植物とあまり情緒的に交わらうとせず、自然に対するとき、ある意味でヨーロッパのキリスト教徒を思わせるほど人間中心主義的態度で振舞うのは、造物主ウェンデの定めに対する確固とした信仰があるためかもしれない。人間の身体にはシーガ (sigga 魂) が宿つており、睡眠中は身体を離れて浮遊し、死後はキーマ (kiima 死靈) となって、あとにのこされた親族の行なう葬礼によって祖先の靈の仲間入りをすると考えられているが、人間以外の動物にはこのような魂は認められていない。前述したように、モシ族にとっての異界であるウェオゴ (weogo 野) とクルガ (kulga 沼 川)、より「かりそめの異界」ないしは「アジール」である、大樹の上や洞の中など結びついた動物としては、ウェ・ナーベ (we-naaba ウハオ<sup>ウハ</sup>の王) であるライオン、クルガの主であるワニなどがあり、と

くにワニは、しばしば聖獸とされて殺されず、ニワトリなどの餌を与えられている。またウエオゴやクルガに、正体不明の老女がいて、乞われるままに沼の老女の背中を洗つてやると背中に大きな穴があり、その中に別世界がひらける（しばしば、木の洞と同様に富をもたらす）ということも、口頭伝承中に語られている。

現実の場での動物との性關係は、つよく忌み嫌われているが、かなりの年齢まで結婚できない男性の多いモシ社会では、獸姦とくにロバの獸姦はよくあつたという人もいる。しかしこれはきわめて恥すべき行為とされているので、その現場を見られた男は、木の枝で首吊り自殺したという。自殺者には通常の埋葬や葬儀は行なわれず、現場に穴を掘つて死体が埋められる。

## 九、モシの昔話における人間と動物

右に概略をみたような自然觀を背景として、またはじめに引いた小沢（一九七九）、中村（一九八四）などによる、日本とヨーロッパ（主としてグリム）の昔話における人間と動物の変身や結婚の比較をふまえて、モシの昔話における人間と動物の關係の性格を検討してみよう。

まず、一般的な特徴として、人間・動物間の明らかな「変身」がきわめて少ないこと、とくに人間から動物への変身は、例15、16のように、ヘビになる以前の状態がすでに正体不明の存在である二例を除けば、例17の、人間からウマへの変身があるだけだ。しかしこの変身もすぐウマから自分の意志で人間に戻つてしまふ「安直な」

もので、話の中心テーマではない。異類婚の前提としての変身も、モシ資料ではすでに見たように、明確なものはきわめて少ない。そして例17の、呪力をもつた尾で触れる例を除けば、すべての変身が自發的に、変身の原因、過程などについての説明一切なしで無造作に行なわれている。例3、7では、ヘビおよび死靈が、それぞれ人間らしい姿になるために、バオバブ、カメレオンなどに皮膚や頭巾をもらうという説明がついている。しかしこの過程の説明も、変身というよりは「借り着」の感じで、楽しく無造作なものだ。モシ資料の語りの中で、「変身する」行為を表わす動詞が、例2のヘビの「脱皮する」を除いてすべて、「成る」、「変わる」の意味で日常きわめて広く用いられている動詞で表現されていることはすでに指摘した通りだ。

その反面、変身を伴わない動物と人間との交渉や性關係、婚姻等は、かなり多く、しかもおおらかに行なわれている。ただその大部分は、人間の女性と動物の男性の關係であり、人間が男性の例は、例11、12の、動物が変身した娘への、人間の男性からの愛情や好意はあっても性關係や婚姻には至っていない場合を別にすると、三例にすぎない。このうち、同話型のヴァリアントとみられる例9、10は、人間の男がサルを妻とし、二例とも妻がサルであることを男がかくれ見て、男とサルとの言いあいがあつたあと、妻であるサルを殺すという、なまなましく陰惨な話になつてている。これに対し、例21の三人の鳥妻の話は誠におおらかな寓話で、三種類のトリが変身もせずにどうやって人間の男の妻でありえたかなどという配慮とは、はじめから無縁なところで話が進行している。

動物から人間への変身が無造作に行なわれているか、もしくは変身などなしで人間との婚姻が成立しているという点では、モシ資料は日本の昔話と共通しており、グリム昔話とは著るしく異なる。しかし、人間から動物への変身がほとんどないという点で、日本の昔話からもへだたつてはいるのである。中村（一九八四、一〇一一三）によると、中村の依拠した資料体である『日本昔話記録』（柳田国男他編）で、人間から動物への変身例が四二例あり、その二一が鳥への変身で、変身の意味は中村のいう「昇華態」がそのうち一三例を占め、他の動物への変身も含めると、「疎外態」一七例、「昇華態」一三例となっている。昇華態はオットウドリの由来譚のように、愛する夫の死体にとりすがつてオットウ、オットウと悲しみ叫ぶうちオットウドリになるという類のものであり、疎外態は「米福糠福」の継子譚におけるように、人間が失意のあまりタニシになつたりするものである。「小島前生」という話型が設定されているくらい、鳥への昇華変身は日本の昔話に多いが、これは柳田国男の『野鳥雜記』に例が挙げられているように、日本において鳥の声の聞きなしが豊かであることと密接な関連があるにちがいない。鳴き声の聞きなしが、逆に遡つて前世の変身譚が作られることもありうるだろう。ヨーロッパにも、鳥の声に意味をもつた言語音をあてはめて聞くことは決して少なくないが（川田、一九八五、一一一三）、日本のように前世譚に結びついてはいない。モシ社会でも、擬音語・擬態語の豊かさをはじめ、言語音と非言語音の結びつきはつよいにもかかわらず、聞きなしはほとんどないといつてよく（川田、一九八三、二六一、二七）、前世の変身譚と結びつく余地もない。これはまた、転

動物から人間への変身が無造作に行なわれているか、もしくは変身などなしで人間との婚姻が成立しているという点では、モシ資料

の観念の有無ともかかわることであろう。

日本の昔話との他の大きな違いは、異類婚の多くが日本では報恩譚であり、妻が人間に変身した動物であるのに對し、モシ資料では前述のように、異類女房譚はごくわずかだということである。モシ資料には、例31にもみられるように、人間の側からの動物に対する忘恩譚がきわめて多いが、動物あるいは人間の側からする報恩譚は全資料体中一例もない。それでいて、動物が困窮している人間または他の動物を救うとき、「恩を知るか？」と三度訊ね、「知る」と答えるので助けるというくだりは頻繁にあらわれる。そして恩を受けた方が、相手に恩を仇で返すような仕打ちをするのである。

報恩のために美しい人間の娘の姿になつて訪ねてくる日本の異類女房譚と異なり、モシ資料の異類婚では、配偶者同士がこまやかな愛情で結ばれていた、話の結末まで見た場合、異類婚は忌むべきものとして語られている。本稿で検討した異類婚の大部分は、ウサギの恵話に付隨したものを除けば、当事者の一方または双方の死（例2、9、10）や、娘の身体損傷（例3、7）をもたらすが、そうでなくとも娘が辛うじて逃げかえる結末になつてている。

異類婚から生れた子についてみると、子に言及しているのは、ウサギの恵話に付隨した例23、24という、同話型の二ヴァリアントと、「怖るべき子どもたち」がカマキリを父としているという例22だけだ。例23、24はどちらも、娘に子を孕ませたウサギに死罪に相当する難題が課せられている。日本の狐女房に典型的にみられるような、異類に戻った母と子との別離の悲しみを強調する話は存在しない。また、異類婚から生れた人間の子、あるいは人間の父母か

ら生れた異類の（または半ば異類の）子が、日本の昔話では狐女房や蛇息子、田螺息子、蜘蛛息子のように、超常能力によって世にあらわれたり家に富をもたらしたりするが、モシ資料では例23、24のように、罰せられるべき行為から生れた存在として、子の性格やその後については言及されないか、例22や例42のように、反社会的な厄介者とされている。

また日本には、昔話ではないが義太夫の『卅三間堂棟由来』のよう、柳の精が嫁入つて男の子をもうける樹木の報恩異類婚譚とでもいうべきものや、昔話の桃の子太郎、瓜子姫、竹の子童子など、植物からの人間の子の誕生を語る話がある。モシ資料に数例ある、木の実の人間への変身を語る話は、すでにみたように、宝のなる木や共妻反目のモチーフがむしろ中心である話としてとらえられるもので、右にあげた日本の、アニミズム的色彩をもち、植物と人間の連續観に支えられたような話とは、根本的に性格を異にしていると考えられる。

結論としていえば、モシ資料では昔話の中で人間と動物はきわめて自由かつおおらかに交わっているが、動物は種としての寓意を担つた形で、いわば“論理的に”人間との関係を保つており、日本の昔話におけるような“情緒的な”交わり、人間の動物に対する“われ”を伴なった情感の表出がきわめて乏しいのではないかと思われる。またモシ資料では、ウサギ・ハイエナ譚をはじめとする動物寓話における補助的要素としての人間を除けば、人間と動物の関係は、日本の昔話におけるようなある意味での“同胞意義”に支えられてはいざ、基本的に人間中心的だといえる。日本の昔話の、とく

に報恩譚と結びついた異類婚における妻と夫、母と子の関係や小鳥前生の物語における情緒性や“あわれ”を、省略された形ではあるが例示したモシ資料における異類婚のなりゆきと対比してみれば、このことは明らかであろう。動物に対しての人間中心的な考え方に関しては、モシ資料はグリムの昔話の世界とむしろ共通するものを持つているともいえるのである。

昔話にあらわれた人間と動物の関係の、このような差異を、それを支えている世界觀、価値觀と対応させて考えるトスレバ、モシ社会における転生觀、アニミズム、多神觀の欠如、清貧をしのぶよりは、ドライに知恵をはたらかせて得をすることをむしろ肯定するような価値意識の存在などがあります挙げられるかもしれない。同じ西アフリカでも、ここにとりあげたモシ社会とは文化の系譜も、生活条件も異なり、多神の世界觀をもつ、たとえばヨルバ族（ナイジエリア）の昔話の分析を、本稿の試みと比較できるような形で行なってみることは、口承文芸とそれを支えている文化の関係を考える上で、も、興味深いのではないかと思われる。

昔話における人間と動物の関係といつても、それは畢竟寓意の世界での関係であることは基本的的前提として認識しておかなければならぬ。本稿では紙数の制約もあり、きわめて不十分にしか資料の提示と分析を行なえなかつたが、昔話以外の口頭伝承の領域——このとわざ、人名、歴史伝承等——における動物のシンボリズムと、いわゆる昔話におけるそれを比較して検討することも重要であろう。それらの領域についても十分な資料を筆者はもつており、いづれ稿を改めて論じたい。

【引用文献】

小沢俊夫（一九七九）『世界の民話——ひとと動物との婚姻譚』  
中公新書。

川田順造（一九八三）「口頭伝承論I」、『社会史研究』二号、  
日本エディタースクール出版部。

川田順造（一九八五）「音の共感覚」、連載「声」第七回、『現  
代詩手帳』一九八五年一〇月号。

関敬吾（一九七八一八〇）『日本昔話大成』一一一一卷、角川  
書店。

中村楨里（一九八四）『日本人の動物観——変身譚の歴史』、海  
鳴社。

なお、「モシ資料」のうち、本稿に例として略記したもののがいく  
つかは、文字化またはレコード化された形で参照することができる。

川田順造「生きている民話、西アフリカ・モシ族」、『子どもの  
館』一九八二年九月号、一〇月号。

川田順造（録音・構成・解説）『サバンナの音の世界』、東芝E  
M I、TWX-9013~4、一九八二。

（かわだ・じゅんぞう／東京外国语大学AA研）